

書評

小西真理子・河原梓水編著

『狂気な倫理——「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定』

(晃洋書房、2022年)

村本 邦子

何と言ってもインパクトのある表紙である。漆黒に銀色に煌めく鋭利なナイフが浮かび上がる。その横に「狂気な倫理」の文字が、控えめに行儀よく並んでいる。誰しも、「狂気な倫理とはいったい何のことだろう」と自問するに違いない。その下に、さらに小さな文字で『「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定』という説明書きのようなサブタイトルが眼に入る。なるほど、この本は、常識的な枠からはずれた人々の生を肯定しようとしているのだ。ナイフは狂気から突き付けられた破壊的な挑戦のように見える。

ひとつひとつ読み進めると、それぞれにユニークな論考が繰り広げられ、共感できる部分が多く思考を刺激される。紙面の関係上、ごく一部にしか言及できないが、たとえば、著者たちの恩師である小泉に倣い、「いかなる子どもであれ、子どもを産み落とすだけで放置したって、何の問題にもならない社会を構築する」ために、親子関係と夫婦関係という概念を解体し、個人単位の住民登録にして、生まれた時からベーシック・インカムを保障すればよいと言う(第5章)。たしかに、親子関係と夫婦関係の概念を解体すれば、虐待の連鎖も(第1章)、カサンドラも(第2章)、毒親(第4章)も言う必要がなくなる。ただ、この場合のケア倫理(第3章)はどうなるのか。ベーシック・インカムによるケアにも当たり外れが出てくるに違いない。また、「産み落とすだけ」と簡単に言うが、命を十月十日抱えることの意味も無視できない。避妊は未来の子ども(第13章)を否定することになるのか。そこに選別意識がなければ問題は無いのか。

全体を通して気になるのは、それぞれの著者たちの立ち位置である。まえがきからは、世間一般の枠外にある生に「意味」を見出そうとする営みを「狂気」と名づけ、理論や学問を武器に、これ

を肯定する論理を立てて代弁しようとしていることが読み取れる。枠外にある生を必ずしも狂気と呼んでいるわけではなく、自らを同じところに置いているわけでもない。そこで扱われているのは果たして狂気というほどのものなのか。吉田おさみの「狂気からの反撃」が引用されるが、狂気の貫徹と反撃という点では、ややパンチが弱いように感じられる。

たとえば、ひきこもりを無縁の倫理、野生の倫理から考える(第8章)試みは興味深いものの、当事者はその倫理を成就できず、所有に囚われて逃げ切れないと言う。そもそも、ひきこもりを成立させる前提には、生命活動を維持するための家や食事の提供があり、そこには大きな縁がある。その大きな縁を手放したとて命をつなぐことができる世界を描き出せないものか。パラリンピック選手(第11章)が、専門家(健常者)によって力を与えられる存在としてでなく、能動的な主体として「闘いの生」を生きることを求めるように、ここで取り上げられる生を専門家によって力を与えられるだけの存在に留めたくはない。

妖怪人間ベム(第9章)から、人類の進化である新たな生命体に開かれる可能性を見る発想は魅力的だ。偶然性や規格外の生成および誕生を欲待し、人間の欲望や意志からはずれたところに生まれる創造にこそ可能性が詰まっている。ただし、著者の言うように、妖怪人間たちが最後に人間を見切つて利己的に妖怪の身体を選んだのかどうかについてはどうにも確信が持てない。妖怪人間たちの人間への執着は、あまりにも人間的であるように感じられるからである。

規格外の生がそのままに自らを肯定することは、かくも難しいのだろうか。だからこそ、著者たちのような研究者がそれを存分に肯定する論を立てる必要があるということかもしれない。本書は徹底的に生命肯定の立場を取り、生命の縁(ふち)を拡げようとしている。だとすれば、それは「狂気な倫理」などではなく、きわめて「まっとうな倫理」である。ここからさらに、さまざまに議論が展開されることを期待している。